論　説

英国における都市をテーマにした文化プロジェクトと都市再生

—リヴァプールの2008年ヨーロッパ文化首都を事例として—

渡　部　　薫

1．本研究の目的

（1）背景

近年、地域においてアートやその他文化を使った大規模な文化プロジェクトや単なる文化振興を超えた包括的な文化政策が、観光の振興や地域の活性化等と結び付けて展開され、その効果・影響が注目されるようになってきている。しかし、日本で近年、各地で展開されているアートプロジェクトと呼称される文化プロジェクトは、地域の活性化への関わりを期待されていても、多くの場合明確な形では謳ってはいない。

それに対して、英国で展開されている「都市規模」と表現できる、都市をあげての文化プロジェクトでは、より明確に都市再生や地域戦略への貢献を主張しており、それを踏まえた評価も行われている。そのような文化プロジェクトとして、近年では2008年にリヴァプールでヨーロッパ文化首都が開催、2013年からは英国文化都市が４年ごとに開催されるようになり、また、2018年にはThe Great Exhibition of the Northという大規模なプロジェクトが開催されている(1)。

本稿は、そのような英国の、自分たちの都市をテーマに掲げた都市規模の文化プロジェクトの経験から何を学ぶことができるか、都市再生の観点

からどのような解釈を引き出すことができるかを問うものである。

（2）基本テーマ（問題設定）

このような都市規模の文化プロジェクトの中でも、リヴァプール市で2008年に開催されたヨーロッパ文化首都（European Capital of Culture）はとりわけ注目を浴びている。都市再生あるいは都市の活性化への貢献という観点からの高い評価から成功事例とされ、その後の英国文化都市のモデルになったとされている。本稿ではこの文化プロジェクトを取り上げ分析の対象とする。

このリヴァプールで開催されたヨーロッパ文化首都という文化プロジェクトは明確な目標を掲げて実施されたが、その効果あるいは影響に対して大学を中心とする評価体制を形成して多くの側面に渡って評価が行われている。そこで問題となるのは、どのような点、側面が都市再生に貢献したと言えるのか、そしてその要因はどのように解釈することができるか、ということである。大規模なプロジェクトであるため地域社会に多様な効果、影響をもたらすことが経験上も確認されているが、都市再生への貢献あるいは関わりという点においてはどのように見ればよいのであろうか。都市規模の大規模文化プロジェクト、とりわけヨーロッパ文化首都の効果・影響については、これまでも多くの研究が行われてきたが、本稿では改めて、個別のプロジェクトを超えて「自分たちの都市をテーマにした文化プロジェクト」という問題枠組みを設定し、そのような視点から都市規模の文化プロジェクトが都市再生にもたらす意味、あるいは、都市再生に与える貢献・影響について追究するものである。このようなテーマ設定によって、重要なプロジェクトについてより一般化した形でその意義を論じることが可能になる。

（3）研究方法／本稿の展開方法

本研究は、対象となるプロジェクトに関連する政策資料、各種団体の発

行している資料や関連する研究論文の収集・分析、及び関係者に行なったインタヴュー調査の分析に基づく。

本稿は次のように展開される。まず、分析の視点が提示され、次にリヴァプールの文化首都というプロジェクトの詳細についての説明、そして分析の視点に基づいて分析・考察及び議論を行う。

2．分析の視点

（1）都市をテーマに掲げた文化プロジェクトであることの意味

本稿が追究する、都市をテーマに掲げた都市規模の文化プロジェクトが都市再生にもたらす意味あるいは貢献・影響という研究テーマについて考えてみたい。本稿で取り上げるヨーロッパ文化首都では、このプロジェクトの開催都市が自らを文化首都としてテーマ化する。ヨーロッパ文化首都は、EUにおいて公式には広義の目的が掲げられているが(2)、文化首都を実施する各都市は、これを再解釈してそれぞれの持つヴィジョンや戦略に基づいて再設定することが可能なのである。ここで着目したいのは、文化首都という制約のもとで自分たちの都市自体を対象としてテーマを設定していることである。本稿では、この文化首都という枠組みを超えて都市がテーマ化していることの意味を問うのである。自分たちの都市をテーマにするということは、その都市について市民自らが改めて認知をして、その都市が市民にとって持つ意味、その都市のあり方を見つめ直し、そこから新たに都市像を再検討・再構築しようとする、少なくともその契機を見出そうとすることにつながるものである。本稿では、リヴァプール市のヨーロッパ文化首都の中に、このような意味において都市をテーマ化した文化プロジェクトという問題枠組みを読み取り、そのような枠組みにおいて都市再生への影響について検討するのである。実際に、リヴァプール市では、将来戦略的に重要なテーマとして設定された都市再生の推進という目的から、ヨーロッパ文化首都というプロジェクトを選択し、実現したのである。

すなわち、都市をテーマにしているということと、それを文化プロジェクトとして実施するということが結びついた形で実現されたと見ることができるのである。

大規模文化プロジェクトということで先行研究について検討してみると、上述したように多様な視点から研究が行われてきた。中でも、ヨーロッパ文化首都については、その規模の大きさ、文化首都という対象の魅力性、毎年開催という継続性、及び異なる都市で開催されることによる比較可能性等から研究上も注目を集め、多くの研究が進められてきた(3)。内容的にも、ヨーロッパ文化首都について包括的に調査研究を行ったEUの調査報告（Palmer/Rae Associate 2004）やRichards and Palmer（2010）の研究に見るように、その経済的成果、地域社会への影響、政策プロセス、ガバナンスの問題、市民参加のあり方等、多岐の項目にわたっている。また、本稿が事例として取り上げるリヴァプールのヨーロッパ文化首都については、地域への影響を中心に、Institute of Cultural Capitalによる調査結果の報告やその組織の中心的な研究者であるBeatritz Garciaの研究（2011）を始めとして多くの研究成果が現れている。

そこには、文化と当該プロジェクトが自都市にもたらす影響の追究のみならず、当該プロジェクトに関わる意味の追究という視点は認められるものの、本稿の論ずるような、個別のプロジェクトを超えて都市をテーマにすること自体の意味を追究するという視点から明確な形で迫っている研究は見ることができない。冒頭に述べたように、ヨーロッパ文化首都にとどまらず、英国においては都市再生や地域戦略への貢献を目的とした、都市規模と表現できる都市をあげての文化プロジェクトが近年多く見られるようになってきていることから、プロジェクトの個別性を超えて都市をテーマにした文化プロジェクトの意味、とりわけ都市再生や都市戦略のような対象都市の未来のあり方やその創造の方法との関わりについて問うことが求められているということができよう。少なくともより一般化した形でこのようなプロジェクトの意義を問う必要がある。

（2）都市再生への貢献・影響を分析する視点

さて、ここでは都市をテーマ化した文化プロジェクトという問題枠組みにおいて、そのようなプロジェクトの都市再生への貢献・影響をどのように見たらいいか、分析する視点について検討してみたい。その参考として、英国文化都市の目的として論じられているところを取り上げたい。

英国文化都市（United Kingdom City of Culture: UKCC）は、上述したように2008年のリヴァプールのヨーロッパ文化首都が成功、とりわけ都市再生に貢献したと評価されたことが一つの契機となって、そのような機会をより広く設けるべく、英国内のみで定期的にヨーロッパ文化首都のような大規模な文化プロジェクトを開催することを趣旨として英国政府によって設けられたプログラムである。管轄する文化メディアスポーツ省（DCMS: Department for Culture, Media and Sport）[(4)]によると、英国文化都市の目的は、①変化への触媒として文化を積極的に活用、②新しいパートナーシップを発展させる、③文化的・創造的活動の志、イノベーション、ひらめきを奨励、④英国の芸術組織の持つ文化的卓越性を連携させてメディアの関心を喚起、ツーリズムを促進、その都市に対する認識を変える、となっている（DCMS 2014）。

これらの目的の中で、本稿が追究する、都市をテーマ化した文化プロジェクトという問題枠組みに基づく都市再生への貢献・影響という点においては、①が大きく関わっている。上述したように、自分たちの都市をテーマにするということは、その都市について市民自らが改めて認知をして、その都市の持つ意味、あり方を見つめ直し、新たに都市像を再検討・再構築しようとする契機を見出そうとする試みと捉えることができる。変化への触媒という考え方は、このような都市のテーマ化という視点が意味することと符合する。すなわち、都市再生の推進という文脈においては、変化への触媒が意味するところは、それに関わる諸活動を担う都市のアクター、さらには、そのような活動に参加あるいは都市の変化を受容する一般市民の行動に関わる認知・精神面での変化、及び彼らの間の都市再生を推進す

るような具体的な新しい関係の形成、という形として現われる作用として捉えることができる。前者の都市のアクターや市民の認知・精神面の変化が都市再生や地域づくりにおいて重要な働きをすることは、例えば、市民の自分たちの都市に対する自信の回復あるいは地域アイデンティティに対する刺激が地域の人々の地域づくりや地域の課題解決の取り組みへの関心の喚起あるいは参加の促進という形でもたらす作用に見ることができる(5)。後者の新しい関係の形成とは都市再生推進枠組みの形成ということになるが、これは英国文化都市の目的の中の②の新しいパートナーシップの発展を含むもので、プロジェクトの実施・遂行にとどまらず、それが終わった後の都市再生の展開につながるような組織間パートナーシップや運営体制の形成にはたらきかけることを意味する。すなわち、都市をテーマ化した文化プロジェクトには、人の心理的側面と人と人との関係の枠組みの両面において、都市再生を促進するような変化を生み出す契機となることが期待されるのである。

以上整理すると、本稿が取り上げる都市をテーマ化した文化プロジェクトが都市再生にどのような意味あるいは貢献・影響をもたらすかという研究テーマを追究するにおいては、a .認知・精神面での変化、b. 都市再生推進の枠組みの形成、という２つの視点に基づいて分析することになる。

3．リヴァプールのヨーロッパ文化首都の経験

ここでは研究の対象となる、2008年にリヴァプール市で開催されたヨーロッパ文化首都についてその概略を、全体の枠組みはどのようなものか、リヴァプールでは実際にどのように進められたか、そこでは何が起きたか、どのような効果・影響があったのか等について見ていきたい。

（1）ヨーロッパ文化首都とは何か

ヨーロッパ文化首都（European Capital of Culture）とは、EU諸国内の指

定された都市で開催される、年間を通じて様々な文化イベントを行う大規模な文化プロジェクトである。文化首都は、まずどの国の都市が担うかが持ち回りで決められ、次に、担当国の中で候補を募り、立候補した都市の中からコンペでの審査を通じて選定される。

上述したように、ヨーロッパ文化首都では公式には広義の目的が掲げられているが、開催する各都市は、これを再解釈してそれぞれの持つヴィジョンや戦略に基づいて再設定し、自らの主体性と責任において実施する。これまでの各開催都市の主要な目的としては、都市・地域の国際的なプロフィールの向上、長期的な文化的発展、観光客を惹きつけること、市民が文化に触れる、あるいは参加する機会を広げること、市民の誇りや自信を高めること等が挙げられる（Palmer/Rae Associates 2004）。

（2）リヴァプールにおける文化首都展開の背景（6）

2008年に文化首都を開催したリヴァプール市は、英国イングランドのノースウェスト地方に位置し、都市圏人口220万人を擁する地域の中心都市である。第二次大戦以降、他の英国の旧来型の産業都市と同様に経済的に衰退し、1970年代以降、多くの産業と職が失われ深刻な経済的停滞、社会的貧困を抱えるようになる。しかも、1990年頃以降英国経済全体の復調もあって他の産業都市が復興しつつあった時期においても、例外的とも言えるような依然とした衰退傾向が続いていた。

90年代には、マンチェスター等の似たような経済的停滞状況にあった都市の経済的再生を目の当たりにして、そのような都市が都市政策の展開において示していたのと同様な、D・ハーヴェイが論じる都市企業家主義的志向を備えた行政が主導権を握り、積極的に都市再生に乗り出すようになり、数々の都心の再整備やインフラ整備等の再生事業を展開するようになる。このように行政が精力的にリヴァプールの変革に乗り出そうとする雰囲気の中で、さらに都市再生への起爆剤として、2008年に英国で開催されることになったヨーロッパ文化首都を絶好の契機として捉え、その指名獲

得を目指すことになる。

（3）プロジェクトの概要

リヴァプールでは、具体的に次のように進められた。まず、運営体制については、当初リヴァプール市主導の推進体制で始まったが、当該年の2008年にこの体制による運営に破綻が生じたため、地域戦略パートナーシップ、都市再生会社(7)、文化芸術団体グループ等から構成される一種のガバナンスによる運営へと移行した。これについては後述する。

設定されたヴィジョンは、主要な目的として次のように整理できる(8)。すなわち、a. シティプロモーションとそれによるツーリスト及び移住者の増大、b. 地域の人々の文化活動への参加の推進、c. 市の文化セクターの持続的な長期的成長のための遺産の創造。

明確には都市再生に言及していないが、このヴィジョンがリヴァプール市の都市戦略的視点から設定されているのは明らかであり、リヴァプールの場合は都市戦略はそのまま都市再生に結びつく。aは文化首都を都市戦略の手段として設定しており、bとcは文化自体が目的になっているが、これもリヴァプールの文化的発展が都市再生あるいは都市の発展に欠かせないという認識に基づくものと見ることができる。

実施状況については、2008年には公式にリヴァプールの文化首都のウェブサイトに登録されたもので830の文化イベントが開催され、そのうちハイライト的として認識されるものは276を数える(9)。2008年の来街者は980万人、2005年から2008年までの４年間のプログラムのトータルでは1830万人を超えている(10)。

収入・支出の総額及び基本構成の全体像は図表１に示される。説明を加えると、この予算規模は1985年から2014年までのヨーロッパ文化首都の中で最大で、平均の約４倍という突出した数値になっている（Richards and Palmer 2010）。また、マーケティングも他の文化首都と比べて突出した規模で、次に多いグラーツの２倍となっている（*ibid.*）。

図表１：リヴァプールのヨーロッパ文化首都にかかる経費の収入源及び支出内容

収入先	収入額（£m）
リヴァプール支庁	74,811
アーツカウンシル及びDCMS	10,528
ERDF	14,268
EUからの支援（ERDFを除く）	809
その他の公的支援	3,112
イベント収入	4,070
各種スポンサー	22,289
合計	129,887

支出内容	支出額（£m）
文化プログラム	77,920
マーケティング	24,912
運営管理費	19,509
その他	7,546
合計	129,887

出典：Impacts 08（2010a），P.17より

（4）効果・影響

リヴァプールのヨーロッパ文化首都では、その効果・影響については、アドホックな調査体制のもとで広範囲にわたる内容について詳細な調査結果があげられてきたが、ここでは、このプロジェクトの概要を見ることが目的のため、概略的にサーベイするにとどめる。

１）調査体制

リヴァプール市の委託のもと、評価の中立性確保と文化政策研究への貢献を目的としてリヴァプール大学とリヴァプール・ジョンムーア大学が共同で効果・影響の調査及び評価を進めている(11)。文化首都によって生み出された成果や影響を遺産として捉え、これの捕捉･検証を目的としている。

２）調査結果——短期的な効果・影響を中心に

文化プロジェクトの地域にもたらす効果・影響としては長期的・間接的な影響が重要であるが、直接的なデータには現れないためこれをいかに捉えるかが問われる。現在の段階では、まだ長期的な影響についての調査結果は一部しか現れていないため、ここではヴィジョンで設定された目的に対して、短期的な調査結果として公表されたImpacts 08（2009, 2010）の資料をベースに論ずる(12)。

〈文化的アクセス及び地域社会の参加〉

これは、リヴァプールの文化首都が開催にあたって重視した点である。地域社会の人々の文化的活動への参加は、自信や自尊心、さらには技能を高めることによって地域社会の発展に貢献すると言われている。実際に、多くのヨーロッパ文化首都では地域社会の人々のアクセス性や参加を高める試みが行われており、リヴァプールでも市民の参加を促進あるいは実現するプログラムが展開され多くの市民が参加している(13)。Impacts 08による住民に対する調査では、66％のリヴァプールの住民が文化首都の少なくとも一つのイベントに参加、14％の住民がこの政策に関連して何か新しいことをやっていることが明らかになっており、また、文化プログラムは一般の人々にも向けられたものであるという意見が08年の前後で16％改善される等の、比較的好ましい結果を得ている。

〈観光・経済〉

リヴァプールのヨーロッパ文化首都は、他の都市の文化首都に比べて予算規模が大きかったこともあり、非常に多くの観光客、来街者を引き寄せるのに成功している。2008年の来街者は970万人だが、この数字は1995年から2007年までの文化首都の開催都市の実績を大きく超えている(Richards and Palmer 2009)。その結果として、7.5億ポンドの直接的な経済効果を生み出したと推計されている。また、間接的な経済効果として約２億ポンドを生み出しており、直接・間接効果併せて約15,000人の雇用を生み出している。海外からの来客数に焦点を当てると、2008年から一旦は低下したものの、2011年には2008年の開催年と同程度に回復し、2013年には2008年を上回り記録を更新している。この年、リヴァプールは海外からの訪問客にとってロンドン、エディンバラ等に続く英国内５番目の人気地域になっている。2008年の文化首都がリヴァプールを国内外に大いにアピールすることになったと評価することができる。これは、他の文化首都では見られない現象である。文化首都の主要なターゲットである創造産業への影響（事業者数の増加）も見られる。ただし、文化首都年及びその直後の影響であ

ることに留意する必要がある。

図表２：ヨーロッパ文化首都への来客数（1995－2008）

ヨーロッパ文化首都の開催都市（年）	来客数（百万）
Luxembourg（1995）	1.1
Copenhagen（1996）	1.5
Avignon（2000）	1.5
Bologna（2000）	2.2
Helsinki（2000）	5.4
Rotterdam（2001）	2.3
Porto（2001）	1.2
Salamanca（2002）	1.9
Bruges（2002）	1.6
Graz（2003）	2.8
Lille（2004）	9.0
Genoa（2004）	2.8
Cork（2005）	1.3
Luxembourg（2007）	3.3
Sibiu（2007）	1.0
Liverpool（2008）	10.0

出典：Palmer and Richards（2009）

図表３：リヴァプールへの海外からの来客数の推移（1999 ～ 2013年）

出典：Visit Britain（2015）

〈文化活動〉

文化イベントが文化セクターに大きな影響を与えることはいうまでもない。アーティスト等の文化活動のアクターは、直接的には活躍の機会や収入が得られることになるが、それとともに創造性への刺激を受けたり、技能を獲得したりする機会にもなると考えられている。また、文化イベントは、文化活動を支える文化インフラの形成・整備や個々のアーティスト・文化関係者やクライアント、あるいは種々の関連団体間での新たなネットワーク形成にも貢献する。

Impacts 08によると、アーティスト・文化関係者等の文化セクターの人たちは概ね肯定的な評価をしている。リヴァプールの文化首都はリヴァプールの文化都市としてのプロフィールを向上させたこと、そしてそれによって来街者が増加したこと、アートや文化を提供する非常に大きな機会を設けたことにより市民の文化の享受の拡大をもたらしたこと、アート・文化関係に対する投資が増えその結果新しいプロジェクトが生まれたこと等の点において成功したと見ている。回答者（アーティスト・文化関係者等）の2/3が文化首都はネットワークの形成や情報の共有に貢献したと答えている。とりわけ､セクターを超えるネットワークの形成･発展はリヴァプール文化首都の一つの大きな成果と見られている。51％の回答者が、リヴァプールは文化首都によって世界クラスの文化都市としての位置づけを獲得したと評価している。

〈都市のイメージ〉

リヴァプールは、文化首都をイメージの再構築と新しい地域ブランドの形成のまたとない機会と捉え、市内の様々な組織の連携の下に、文化首都を活用して都市の新しい文化イメージ構築のための活動を展開する。2000年以降2008年まで毎年テーマを決めてマーケティングおよびプロモーション活動を精力的に展開したのである。マーケティングに使った費用は2.7千万ユーロという膨大な額に達している。これは、1995年から2008年までの文化首都の中でやはり突出した規模で、次に多いオーストリアのグラー

ツ市の２倍となっている（Richards and Palmer 2009, *op.cit*）。

結果として、2008年の文化首都は英国内外の人たちがリヴァプールに対して持つ認識を大きく変えることになった。Impacts 08がまとめた主要な調査結果は次のとおりである。

・2005年から08年にかけて英国内でのリヴァプールに対する肯定的な印象が53％から60％へと上昇、他方で否定的な印象は20％から14％に下がっている

・77％の来街者は、リヴァプールは思っていたより安全と感じ、99％はリヴァプールの全体的な雰囲気を気に入り、97％が歓迎されていたと感じている

・68％の英国内のビジネス関係者は文化首都年がリヴァプールに対して肯定的な影響を与えたとみなしている

対外的な影響だけでなく、市の内部、すなわち市民の人たちのリヴァプールに対して持つイメージあるいは自己認識にも肯定的な影響が見られるが、これについては次の４章で取り上げたい。

４．分析・考察

ここまでリヴァプールのヨーロッパ文化首都プロジェクトが実際に経験してきたことについて見てきたが、リヴァプール市ではこの大規模プロジェクトを明確に都市再生に結びつけて企画･実施しており、短期的には、地域の活動や経済への影響を通じた都市再生への貢献を見ることができる。では、本稿が設定する都市をテーマに掲げた都市規模の文化プロジェクトという視点からはどう評価できるのであろうか。ここでは、２章で論じた分析の視点に基づいて、文化首都というプロジェクトの都市再生への貢献・影響に対する評価について検討する。まず、認知・精神面の変化、都市再生推進枠組みの形成に対する影響という点に関して、実際にリヴァプールの2008年文化首都によってどのように現れた（と解釈できる）かに

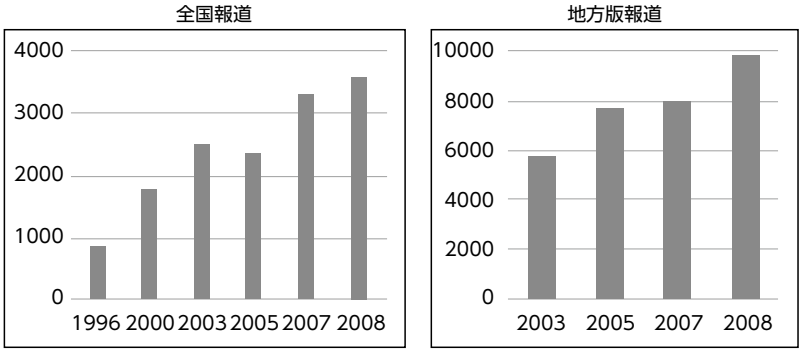
ついて検討し、それに基づいて、文化の作用及び都市がテーマになっていることの意味について検討・考察したい。

（1）都市再生への貢献・影響に対する検討・評価

地域のプロジェクト、とりわけ文化プロジェクトが地域の人々の認知・精神面への影響を通じて都市再生と関わりを持つことについては、英国の多くの研究で論じられている(14)。地域戦略的に位置付けられたプロジェクトの一つの可能性として、市民の自己意識のポジティブな変化、将来への共有化された展望の形成等をもたらすことを通じて市民の前向きな姿勢を引き出すことが考えられる(15)。それによって都市再生のような地域の変化を後押しすることが期待されるのである。

まず、認知面については、市民が自分たちの都市であるリヴァプールに対してどれだけ意識を向けているかということになるが、直接これについて説明するものがないため、メディアによる報道を通じて推論することになる。地域に対するメディによる報道は当然地域の人たちの自分たちの地域に対する再認知、あるいはある種の自意識に作用するからである。図表４は、リヴァプールという地域に関する報道数が1996年から2008年の間にどのように変化したかを見たものである。これによると、1996年から報道数は上昇しているが、とりわけ文化首都年の前年に当たる2007年と当該年

図表４：リヴァプールに関する報道数の年変化

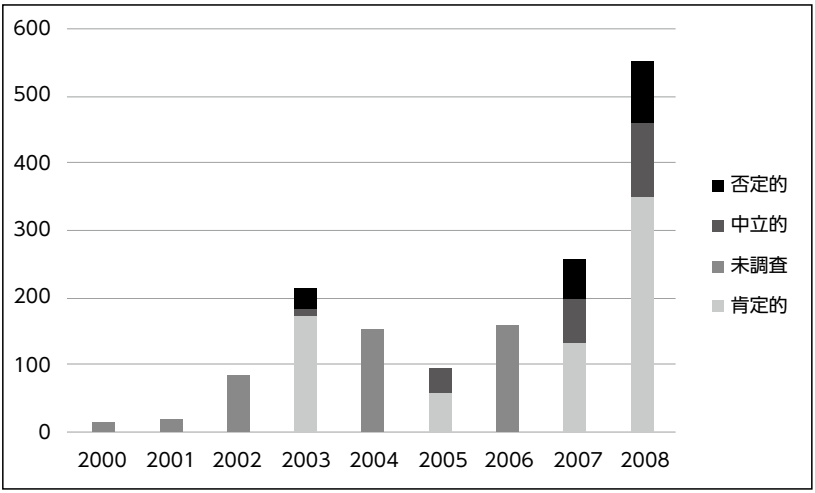


出典：Impacts 08（2010d），P17より

である2008年には非常に大きく報道されていたことがわかる。これはもちろん、リヴァプール市外の人たちのリヴァプールに対する注目を呼ぶことになるが、リヴァプール市民の地域に対する再認知にも影響する。

次に、ヨーロッパ文化首都に対する報道のあり方については、判明している2003年、2005年、2007年、2008年を見ると、リヴァプールが文化首都の指名を獲得した2003年は特に顕著だが、2005年を除くと好意的な報道が否定的な報道よりかなり多いことがわかる。リヴァプール市民にとっては、メディアを含めて外部のリヴァプールに対する評価が低いと受け取ってきたことからすると、文化首都についてのこととはいえ、自都市で開催される自都市をテーマにしたプロジェクトに対する高い評価を目の当たりにすることになる(16)。

図表５：リヴァプールのヨーロッパ文化首都についての報道数及び報道の仕方の変化

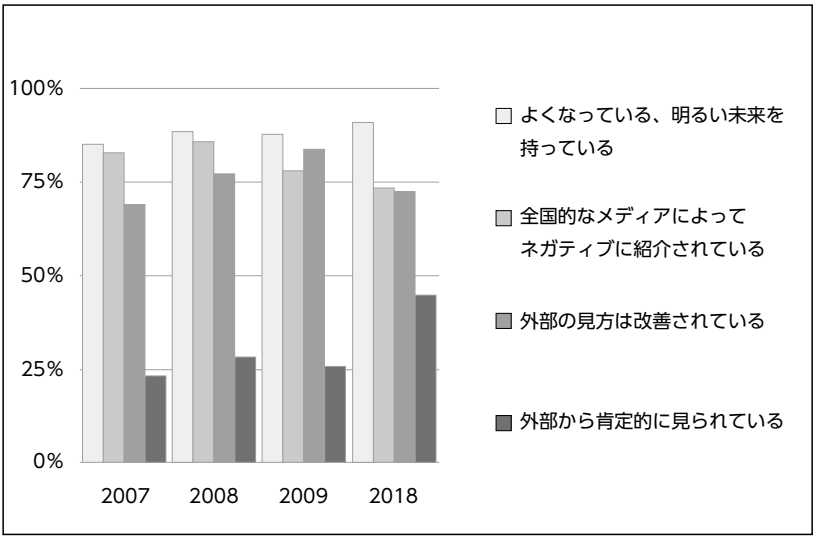


出典：Impacts 08（2010d），P24より

ヨーロッパ文化首都の影響に対するリヴァプール市民自身の評価については、住民調査によると、「リヴァプールはよくなっている、明るい未来を持っている」と評価する声は既に文化首都のプログラムが始まっていた

2007年時点で80%を超えていたが、2018年時点では90%に達している。また、「外部の見方が改善されている」という声も2007年以降常に70％を超えており、2018年においても75％近くを維持している。「外部から肯定的に見られている」という意見は概して高くないものの、2018年では50％近くに達している。全体的に2018年時点においても高い数値を保っているのは、2008年以降も引きつづく、「遺産」を持続させるための試み(17)も影響していると考えられる。整理すると、この調査からは、文化首都がリヴァプールに創り出そうとする未来に対するリヴァプール市民の肯定的な評価、あるいは自己認識の向上（外部の目を通じたもの）を見ることができる。

図表６：文化首都のリヴァプールへの影響に対する地域住民の評価（2018年）



出典：Impacts 18（2019）

これは一般市民の認知・精神面での変化であるが、当然、経済活動の事業者や文化政策、都市再生に関わるアクターにも影響を及ぼしている。Impacts 08により創造産業の事業者に対して行った調査では、文化首都が

地域の士気を高めたとの結果を得ている（Impacts08 2009）。本研究において文化関係者に対して行ったインタヴュー調査（2017年12月、2019年５月、９月に実施）[18]では、すべての人がヨーロッパ文化首都はリヴァプールの未来への展望を示したと答えている。その中で文化事業者のLeanne Jones氏は、「リヴァプールの可能性が広がり、ここに住む意味を強く感じるようになった」と話している。

以上のような調査からは、リヴァプールの人々の未来に対するポジティブなイメージ、地域内外からの注目に対する自覚が確認でき、これらがリヴァプールという自分たちの都市に対する市民の認知、さらには精神面に働きかけたと見ることができる。

次に、都市再生推進枠組みの形成について見てみたい。Impacts 08を始めとして多くの政策関連の資料から、文化首都を契機として文化関係者・事業者間を中心に各種組織間でパートナーシップ、ネットワークが形成されたことが確認できる。そして、より大きな枠組みとしては、文化首都運営の試行錯誤の中から多くの団体が参加する運営体制が形成され、これがその後に続く都市再生推進枠組みの基盤となっている（O’Brien 2011, インタヴュー調査（2017年12月、2019年５月、９月））[19]。これについては、項を改めて文化首都のガバナンス形成過程として詳細を見ていきたい。

（２）文化首都のガバナンスの形成過程及び実態についての分析

リヴァプールの2008年以降の都市再生推進枠組みの形成が文化首都の開催に大きな影響を受けていると論じたが、ここでは本研究の目的に即して、ヨーロッパ文化首都という「都市をテーマにした大規模文化プロジェクト」という特性がそのような都市再生推進の枠組み形成にどのように影響したかを検討する。そのために、文化首都のガバナンスの形成過程及び実態を見ることによって文化首都というプロジェクトがどのようなプロセスで、どのような点に関わり、そしてどのようなガバナンスの枠組みをもたらしたのかについて確認したい。

リヴァプールにおける文化首都全体の運営体制とそのガバナンスの推移あるいは変化を見ることになるが、リヴァプールでは、大きな注目を集める大規模プロジェクトによって地域のそれまでの様々な取り組みに活力を与え、また、都市の位置づけを変える等を通じて、その後の都市再生に大きな弾みをつけるという目的が明快であり、そのような政策の展開という文脈において文化首都のガバナンスのあり方を見ることが可能である。

ヨーロッパ文化首都の指名キャンペーンを開始するにあたって、リヴァプールの場合、もともと確立された文化政策の体系を持っていなかったため、当初から文化首都のガバナンスをどう構築するかということは非常に重要な問題であった。まず、2003年に指名に向けた準備を開始し、リヴァプール市は文化首都の準備及び運営のための組織としてリヴァプール文化会社（Liverpool Culture Company: LCC）を創設し、LCCを中心とした準備・運営体制が生まれる。しかし、このLCC主導、実質的にはリヴァプール市主導の体制は混乱が続き、行政セクターが文化首都の準備・推進において主導的役割を十分に果たせない状況が現れ、結果的にこの運営体制は崩壊する。代わりに、地域戦略パートナーシップ[20]のリヴァプール・ファーストが中心となって、行政も含めた文化芸術や都市再生に関わる主要なアクターが参加する、文化首都を運営するための政策ネットワークが形成され、文化首都プロジェクトの推進・実施を担うようになる。そのとき重要な役割を果たしたのが、市内の８つの主要な文化芸術団体がこの文化首都の運営をめぐって形成したLARC（Liverpool Arts Regeneration Consortium）[21]という組織である。2008年の文化首都年以降もこの政策ネットワークはリヴァプールの文化戦略のガバナンスを担うことになるが、LARCがその中において主導的な役割を果たすようになっていく。また、その後主要なメンバーとしてCOoL（Creative Organizations of Liverpool）[22]という、LARCとは異なり小規模の文化活動が集まった組織もこのガバナンスに参加する。

この政策ネットワークは、リヴァプールの文化戦略に関わる計画策定、

事業促進等を担っているが、とりわけ特定の大掛かりな文化プロジェクトの基本計画や事業計画の策定及び実施に大きく関わっている。また、文化首都の指名を受けた2003年以降、リヴァプールでは都市戦略や都市再生の計画・推進において文化政策が不可欠な要素になったため、この政策ネットワークは都市再生自体においても推進枠組みのベースになっている(23)。すなわち、都市再生推進枠組みの形成を導いているのである。このように、政策ネットワークは、文化それ自体の目的と都市再生という都市の戦略目的との調整も行いながら、2008年以降は、とりわけ文化首都の「遺産」の維持活用という重要な課題に取り組んでいる。なお、文化首都の遺産としてリヴァプール市が求めようとするものについて説明すると、短期的な成果よりむしろ長期的な影響——市民の自信の向上、様々な活動におけるパートナーシップの形成・発展、対外イメージの向上、市内外にわたるビジネスネットワークの形成・発展等——を意味している。

ここに見られる状況は、文化政策研究者のO'Brienによると、R·A·W·Rhodesのいうネットワークによるガバナンスという理論的枠組みに合致していると解釈される（O'Brien 2011）。そこではガバナンスの概念が論じる、参加するアクター間の相互依存関係、行政と市民社会の公共性をめぐる垣根の曖昧化という状況のもとで、政策に関わるアクターが資源を共有して、基本的に水平的な関係の中で政策を取り決める姿が見られるという。現代のように機能分化が進み個々のアクターに自律的な行動が求められる社会においては、政府が主導するヒエラルキー的関係では社会に分散する資源の十分な調達あるいは活用ができない。文化政策領域ではこの傾向はさらに顕著で、文化関係の個々の分野における専門知識や人材、各種の情報という資源的要素については、様々なアクターに分散しているが、しかも行政よりも民間の文化関係団体やアーティストに多く集まっているということができる。リヴァプールでは、水平的な関係を前提としたこの政策ネットワークによって文化政策や都市再生の政策形成やプロジェクトの計画・実施に必要な資源を動員したり活用したりすることが可能に

なったのである[24]。なお、このネットワークは公式的な枠組みは持たず、必要に応じて政策課題やプロジェクトに対応する形でそれに関係するメンバーによる会議や集まりが開催されている[25]。

政策ネットワークによるガバナンスには大きなメリットがあるとしても、現実には文化政策に限らず多くの領域における政策の形成や展開については、行政――地域においては自治体――が主導権を握り、他の関連するアクターについてはその力を借りる、あるいは活用するにとどまる場合が圧倒的に多い。これは英国の文化政策においても同様である[26]。では、どうしてリヴァプールの文化政策では、そのような政策ネットワークによるガバナンスが現れたのであろうか。一つの見解として、O'Brienは、行政であるリヴァプール市に文化計画の強固な伝統がなく、そのため10年以上にわたって文化政策を活用した都市再生の機会を逃してきたことや、文化政策に関する制度的な能力が欠如していたこと、そして、逆にリヴァプール自体に文化的蓄積がありそれに応じた有力な文化・芸術団体が存在していたことが、このようなガバナンスを結果的に招くことになったのではないかいう解釈を示している（*ibid.*）。リヴァプール市主導で行ってきた文化首都の運営をめぐる混乱が、行政主導ではないオルターナティブなガバナンスを求めることになり、結果的にLARCを中心とする政策ネットワークによるガバナンスを導くことになったと説明できるのである。

しかし、それだけであろうか。文化事業者・関係者へのインタヴューによると、ヨーロッパ文化首都の、リヴァプールにとっての、とりわけ文化セクターにとっての重要性が、彼らの政策ネットワークへの参加を促している。例えば、政策ネットワークの中心的なメンバーであるLARCについては、リヴァプールの文化首都に関わった英国アーツカウンシルのJane Beardsworth氏によると、このプロジェクトがリヴァプールの文化セクターにとって重要な機会になるとの思いがLARCの構成メンバーに共有されたことでこの組織が形成されている[27]。また、COoLも、同様な思いからそのような動きに影響されて形成されている[28]。LARCもCOoLも自らを組

織化することによって文化団体として文化首都の運営に参画することを意図していた。政策ネットワークの形成は、上述したように地域戦略パートナーシップのリヴァプール・ファーストのイニシアティブで始まっているが、LARCやCOoLのようなメンバーが参加することでその実質的な意味を獲得したのである。文化首都の混乱は、結果的に政策ネットワークの形成及び個々のアクターが参加するための重要な契機となったが、それも文化首都自体のリヴァプールという都市にとってもつ意味がアクターたちの参加を動機づけたものと考えることができるのである。このような行動には、この文化首都というプロジェクトがリヴァプールにとって持つ意味の重要性が、市民、とりわけ文化関係者のリヴァプールという自分たちの都市に対する再認知、しかもポジティブな見方を伴う再認知をもたらしたこと（前節（1）を参照）が影響したと見ることができる。

以上、リヴァプールにおける都市再生推進の枠組み形成がヨーロッパ文化首都の「都市をテーマにした大規模文化プロジェクト」という特性からどのように説明されるのかを見るために、文化首都のガバナンス形成過程について検討してきた。そこでは、文化首都プロジェクトによってリヴァプールがテーマ化されることで、そしてそれが大規模なプロジェクトだったために、文化首都に関わる市内の文化関係アクターの自都市に対する認知に働きかけることになったことが一つの重要な要因となって都市再生推進の枠組みにつながる文化政策のガバナンスを生み出したと推論される。すなわち、a. 認知・精神面の変化が生み出され、そこからb. 都市再生推進枠組みの形成が導かれたということになる。しかし、これだけでは十分な議論とは言えず、補完する説明が必要である。次節（3）においてこの点について見ていきたい。

（3）議論：文化の作用及び都市がテーマになっていることの意味

ここまでリヴァプールのヨーロッパ文化首都というプロジェクトの都市再生への貢献・影響について、認知・精神面の変化、都市再生推進枠組み

の形成についての影響という視点から検討・評価してきた。では、これをどう解釈するか。リヴァプールの都市再生を推進するために必要と考えられるこのような変化（認知・精神面の変化、新しい関係の形成）は、都市をテーマにした大規模文化プロジェクトであることからどのように説明されるのであろうか、改めて検討してみたい。

この検討にあたって、試論として２つの議論を提示したい。一つは、このような変化を価値創造のプロセスに伴う作用として解釈することであり、もう一つは文化の作用として見ることである。以下、これらの解釈について検討してみたい。

A．プロジェクトの形成を一種の資源化＝価値の創造のプロセスと見る

これについては、資源化という概念を用いて文化と人の社会関係との関わりについて論じる文化資源論の議論を導入して考えてみたい。文化資源論では、潜在的資源が顕在化される、すなわち資源化されるときそこに人々の関与が生じ、その中で人々の間に協力関係が生まれる可能性があり、文化にもその資源化の過程でそのような可能性を見ることができると論じる[29]。そこでは、資源化を一種の価値の創造として捉えている。価値の創造という目的が人々の関与をもたらし、これを実現するための活動を生み出す。これらの価値が魅力的、あるいは意義が高いものであればあるほど、参加する人たち、関係する人たちも多くなる。このような参加者、関係者が価値の創造という目的を実現するために、彼らの間に相互作用が生まれ、その中から連携・協力関係が形成されていく。もちろんこのようにならない場合もあるが、その時には価値の創造は実現されない。ここで、文化資源かどうかは問わず資源化においては潜在的資源の中に価値を見いだすことが重要となるが、潜在的資源ということは価値を持っていると見なされるべき資源が明らかな形では見えないことになる。これについて、佐藤仁は、資源を「働きかけの対象となる可能性の束」と定義し、何に資源を見るかは私たちの「見る眼」に依存すると論じる（佐藤　2008）。すなわち、何

が資源化の対象となるかは、潜在的資源に働きかける人が見出そうとする価値に依存すると解釈される。

ヨーロッパ文化首都のような文化プロジェクトも一種の資源化、とりわけ文化の資源化の取り組みと見ることができる。開催都市をテーマにしている文化プロジェクトということで、都市自体が資源化の対象、働きかける対象になることを意味する。当該都市がテーマになることによって、その都市の存在自体に意識が向けられ、その可能性を認知し、価値を見出そうとするのである。当該都市に関わる多様な側面にかかる価値の創造、全体としては都市自体についての潜在的価値の顕在化(30)であり、その過程を通じて当該都市全体に関わる該当する活動、この場合は文化プロジェクトに関わる活動の創造、連携・協力関係の形成あるいは再構成が生じると考えられる。リヴァプールのケースにおいて、都市再生推進の枠組み形成につながる文化首都のガバナンスの再構成は、基本的にはこのような文化の資源化によって説明できる。

この議論に付け加えたいのは、文化首都という都市をテーマにしたプロジェクトがリヴァプールの持っている多様な価値、とりわけ文化的価値の顕在化という点においてリヴァプールにとって重要であり、かつ期間限定的であるという認識が、潜在的関係者が関与する契機を拡大した可能性である。すなわち、モメンタム（機運）の発現である。このモメンタムが資源化のプロセスを推進することで広範にリヴァプール市内の関係者の参加を促進したと考えることができる。2008年の文化首都年における運営体制の崩壊後に現れた、LARC、COoLのような組織の誕生、これらの組織を含めた関係するアクターのガバナンスへの参加による政策ネットワークの形成は、そのような動きを説明する。前掲のアーツカウンシルのBeardsworth氏が論じる「このような重要な機会を逃してはならない」というLARCの形成を推進した強い思いの共有も、このときのモメンタムがもたらしたものと解釈できる。

B．文化の作用はどう説明できるか

基本的には文化都市というイメージの作用として理解される。政策的に構築された地域イメージは、地域の外部だけではなく地域内の人々にもインパクトを与える[31]。そのとき、（2）で論じたように外部の評価は地域の人々の自分たちの地域に対する自己評価にも影響を与える。リヴァプールの文化首都の場合は、国際的に注目されたプロジェクトであったため、英国国内や海外のメディアが大きく取り上げ、英国内外の人々が来訪しリヴァプールの文化都市としてのイメージを語ったため、リヴァプールの人々もそのイメージに強く影響されるようになる。もちろんリヴァプール市民は、ヨーロッパ文化首都として政策的に打ち出されたメッセージを直接的に受け、そして実際にそのメッセージを表現しようとするイベントを目の当たりにする。このようにリヴァプール市民が直接的、間接的に受け取ったイメージは、リヴァプールの文化都市としての明るいポジティブな未来像、あるいは将来への可能性を提示するものであった。これは英国では地域の文脈と文化政策の文脈が交差するところにおいては、経済的に重要性が大きく成長可能性の高い文化産業・創造産業やそれに関連する創造都市の概念に結びついたものである。

文化都市というイメージの作用を理解するためには、より原理的には文化に内在する文化的価値[32]の意味作用に対して目を向ける必要がある。もちろん文化とは異なる事象においても何らかの意味作用を見ることができる。しかし、文化自体が意味が結晶化したものとして捉えられるものであるため文化的価値の意味作用は強いのである。すなわち、人に何らかの形ではたらきかける力､例えば行動の動機づけ等の作用が強くなる。また、文化は具体的には、特定の地域における人々の生活や活動の経験とその蓄積から生み出されたものであり、地域の固有性の重要な要素であるため、地域の人々の自分たちの地域に対するアイデンティティを刺激するという形でも作用する。

リヴァプールのヨーロッパ文化首都においても、文化都市というイメー

ジが地域の文化の発掘・顕在化を伴う形で文化の持つこのような意味作用を発揮することによって、リヴァプールの人々の認知・精神面に影響したと考えられる。文化首都が都市を、この場合はリヴァプールをテーマ化したものであるため、リヴァプールという都市がそれ自体として持つ意味に対する地域の人々の認知・関心を高め、あるいは地域アイデンティティを刺激し、プロジェクトが提示した文化都市というポジティブなイメージに関心が向けられ、結果的にその受容と共有を促進することになったと解釈されるのである。それによって地域の人々の自信を高める等の、自己認識にポジティブな変化をもたらし、明るい将来展望を共有化することで(33)、都市再生のような地域を変えようとする取り組みに対する前向きな態度、積極的な協力関係を生み出すことにつながったのではないであろうか(34)。ただし、注意すべきは、文化首都が提示する文化都市というイメージだけで、あるいは、文化の作用だけで、人々の認知・精神面の変化や新しい関係の形成を導けたとは考えられないということである。都市をテーマにした注目される大規模なプロジェクトであったからこそ、そのような影響が生じた、あるいは意味を持つ程の影響になったと解釈すべきであると思われる。

5．おわりに

本稿は、自分たちの都市をテーマに掲げた都市規模の文化プロジェクトという問題枠組みを設定し、そのような枠組みに見られる特性が都市再生にもたらす意味、あるいは、都市再生への貢献・影響について、都市再生の推進等に関わる地域のアクターや一般の人々の行動に関わる a. 認知・精神面での変化、及び b. 彼らの間の都市再生を推進するような具体的な新しい関係の形成という２点に着目し追究した。取り上げたリヴァプール市で2008年に開催されたヨーロッパ文化首都の事例では、aについては地域の人々のリヴァプールという自都市に対する再認知あるいは認知の覚

醒、自己認識のポジティブな変化、前向きな態度の形成等がもたらされたこと、bについては、前者の変化も作用して文化首都運営の試行錯誤の中から多くの団体が参加する政策ネットワークによるガバナンスが形成され、その後に続く都市再生推進枠組みの基盤を導いていることが確認できた。

このような変化についての、都市をテーマにした文化プロジェクトという問題枠組みに基づく解釈をめぐっては、試論として２つの議論を提示した。一つは、文化プロジェクトの形成を一種の資源化という価値創造のプロセスとして捉え、そのプロセスにおいて連携・協力関係が生まれると解釈するものである。そこでは何が資源化の対象となるかは、潜在的資源に働きかける人が見出そうとする価値に依存するとされる。ヨーロッパ文化首都では開催都市自体がテーマになることによって、その都市という存在自体に地域の人々の意識が向けられ、その可能性を認知し、価値を見出そうとするのであり、文化首都の実現を目指した価値創造のプロセスを通じて関係するアクター間で新しい関係が形成される可能性をもたらすと解釈される。リヴァプールのヨーロッパ文化首都のケースでは、プロジェクトの重要性と単発性がモメンタムを発現させることでこの動きを強めた可能性を見ることができる。

もう一つは、文化プロジェクトによる文化の作用として見るもので、ヨーロッパ文化首都の文化都市というイメージが持つ文化の意味作用が市民の認知・精神面に与える影響を説明する。リヴァプールの場合は、このような文化の意味作用によって、文化首都がリヴァプールをテーマ化したものであるためリヴァプールという都市がそれ自体として持つ意味に対する地域の人々の認知・関心を高め、あるいは地域アイデンティティを刺激し、プロジェクトが提示した文化都市というポジティブなイメージの受容と共有を促進することによって地域の人々の自己認識のポジティブな変化、前向きな態度の形成をもたらしたと解釈される。

このような議論には検討すべき余地も大きいが、文化プロジェクトに対

して、本来その文化的要素がゆえに持つと認識すべき認知・精神面の影響という心理的側面に焦点を当てたという点において、今後、文化プロジェクトの都市再生に対する可能性を検討するための問題提起を行なったとして、意義を主張することができると思われる。

都市再生には、物理的な整備だけではなく、長期的には都市再生への取組みの姿勢やそれを支え・推進するための協働関係の構築や体制づくり、さらには自己認識や精神面の変化こそが求められる。その点においてリヴァプールのヨーロッパ文化首都は自己、すなわちリヴァプールという都市を文化に結びつけてテーマ化し、その上で文化を最大限に動員・活用することでそのような変化をもたらすことによって、都市再生の推進に大きくはたらきかけることに成功したということになる。その意味では一つの都市再生モデルを提示したということができるのではないか。

注

（1）英国では、ヨーロッパ文化首都は1992年にグラスゴー市で開催（正確には、1998年まではヨーロッパ文化都市）、その後2008年にリヴァプール市で開催されている。英国文化都市は2013年に北アイルランドのデリー（ロンドンデリー）市で最初に開催され、４年後の2017年にハル市で開催、その後も４年ごとに英国内の指名された都市で開催されることになっている。The Great Exhibition of the Northは、ニューカッスルと隣接するゲーツヘッド市で2018年に開催されている。

（2）Palmer/Rae Associates（2004）では、次のように説明されている。’to open up to the the European public particular aspects of the culture of the city, region or country concerned and to highlight the richness and diversity of European culture and the features they share as well as to promote greater mutual acquaintance between European citizens.’

（3）都市規模の文化プロジェクト、とりわけヨーロッパ文化首都の影響・効果については、数々の事例を総括した全体的な評価としてPalmer/Rae Associates（2004）、Palmer and Richards（2007, 2009）等の報告書がある。また、英国のグラスゴーやリヴァプールに限定してもBooth and Boyle（1993）, Paddinson（1993）, Garcia（2004, 2005, 2010）等多くの研究を見ることができる。しかし、

これらは文化プロジェクトの効果・影響の全体を扱っており、都市再生への貢献に特定して明確な視点を設けた研究ではない。

（４）現在では、Department for Digital, Culture, Media and Sport（略称は依然DCMS）となっている。

（５）例えば、自信の回復については、はMiles（2005）、Bailey, Miles and Stark（2004）、地域アイデンティティについては、田中（1997）や渡部（2009）が論じている。

（６）この節の記述の多くの部分は、Parkinson and Bianchini（1993）、Thompson（2011）に基づく。

（７）地域戦略パートナーシップ、都市再生会社についてはそれぞれ注（20）、（23）において説明。

（８）Impacts 08（2010a）では、リヴァプールの2008年ヨーロッパ文化首都のヴィジョンを構成するものとして次の４つの主要な目的を掲げている。

Ａ．国内及び海外のオーディエンスに対してリヴァプールを新たに位置付け直し、リヴァプール及びノース・ウェスト地域にさらなる来街者を呼びよせる

Ｂ．マージーサイド及びそれを超える地域の人々が文化活動に参加することを奨励する

Ｃ．リヴァプールの文化セクターの持続可能な長期的な成長のための遺産を創造する

Ｄ．アートや文化の働きによってこれからのリヴァプールが生活し働く場所として望ましく、また訪問するに値する場所になっていくということを国内的、国際的に宣伝する

（９）プログラムの基本構成は次のようになる。すなわち、より純粋に文化的なプログラム、都市再生及び都市のイメージ再構築と交差するプログラム、ヨーロッパという文脈に基づくプログラム。

（10）ここに計上されているのは2005年からの４年間のものであるが、リヴァプール市は2003年に指名を受けて以降、2008年までの間にも毎年プレイベント的なプロジェクト、さらに終了後２年間についてもプロジェクトを展開している。

（11）両大学は、この調査を目的とした協力・提携のための組織としてInstitute of Cultural Capitalを設立し、リヴァプール市の委託のもとで調査を行っており、現在も続いている。

（12）Impacts 08とは、注９で説明したInstitute of Cultural Capitalがリヴァプール市の委託のもとで行ってきた調査に基づいて公表した調査結果の報告書であ

る。この３章での説明は、図表２、３を除いてこの資料に基づく。

（13）Creative Communities というプログラムは、2004年から2008年にかけて市民の日常生活に芸術を定着させることを目的に実施された。2008年には、3,500の関連したイベントが開催され、6,500人のアーティストと40,000人の一般参加者が協働した（Impacts 08 2010a, *op.cit.*）

（14）例えば、上述したMiles（2005）、Bailey, Miles and Stark（2004）以外にも、次のような論文がある。Paddison（1993）、Garcia（2005）、Bennett（2013）、Collins（2016）。

（15）Miles（2005）を参照。

（16）地域に対する対外イメージが対内イメージに作用することについては、田中（1997）を参照。

（17）2008年以降も文化首都の遺産の維持のため、文化首都にちなんだプロジェクトを開催しており、とりわけ2018年には、文化首都10年を記念して大掛かりなイベントを開催している。

（18）次のインタヴューに基づく。2017年12月11日にLiverpool Royal Philharmonic Hallで行ったRoyal Liverpool Philharmonicのチーフ・エグゼキュティブのMichael Eakin氏へのインタヴュー、2017年12月13日にTate Liverpoolで行った英国アーツカウンシルのJane Beardsworth氏へのインタヴュー、2019年５月29日にBaltic Triangle事務所で行ったBaltic TriangleのChris Green氏へのインタヴュー、2019年９月18日にThe Gallery Liverpoolで行ったCOoLのLeanne Jones氏及びHelen Ball氏へのインタヴュー。

（19）注16のインタヴューに加えて、2017年12月13日にLiverpool City Hallで行なったリヴァプール市上級政策官のMartin Thompson氏へのインタヴューに基づく。

（20）地域戦略パートナーシップ（Local Strategic Partnership）とは、英国のイングランドの地域において設置される地域全体を戦略的に検討するような包括的なパートナーシップの組織を指す。英国では、労働党ブレア政権において地域再生等の諸課題に対応するべく自治体をはじめとする各種の団体間のパートナーシップの形成が推進されていたが、地域戦略パートナーシップは、それらを包括して戦略的にパートナーシップによる地域の政策を推進することを役割としている。

（21）LARC（リヴァプール芸術再生協会：Liverpool Arts Regeneration Consortium）は、2008年の文化首都のプログラムにおける積極的な関わりとそれを通じてマージーサイドの都市再生において主導的な役割をはたすことを目的として

2007年にリヴァプールの主要な８つの文化芸術団体が集まって結成された。LARCは、彼らの持つ文化芸術領域における専門能力を発揮して「市民活動の中で文化セクターのリーダー的な役割を果たすこと」をミッションとして掲げ、都市再生への関与を明確にしている（LARC website、2018年４月30日）。

（22）COoLは、リヴァプール地域に拠点を置く32の文化活動組織が集まった連携組織で、各種の文化的パートナーシップ形成を目指しつつ、アーティストや文化団体等の取り組みにおいて包摂性、多様性、参加及び協働的作業実践を支持することでリヴァプール地域の文化的供給を推進する役割を果たすことを目指している（COoL website、2018年４月30日）。

（23）都市戦略や都市再生に関わる政策課題やプロジェクトがアジェンダになる場合は、構成メンバーについて整理すると、リヴァプール市の文化政策部門、LARC、COoL、リヴァプール大学とリヴァプール・ジョンムーア大学の協力・提携組織のICCといった文化政策系に加えて、リヴァプール市の都市計画部門、パートナーシップの推進を中心に政策形成全体に関わる地域戦略パートナーシップのリヴァプール・ファーストや都市再生会社のリヴァプール・ヴィジョンが主要なメンバーとして役割を果たしている（上述のMartin Thompson氏へのインタヴューに基づく）。都市再生会社（Urban Regeneration Company）とは、特定の地域の都市再生の推進を目的として、対象地域全体に密着した将来ビジョンを掲げ、その実現に向けた事業を行う組織である。該当する地域の自治体等によって設立される会社組織であり、独立した組織としての形態を持っている。活動の推進においては、対象地域の戦略的再生枠組みやマスタープランのもとで、自治体等の行政組織に加えて、対象地域の企業やコミュニティ団体等の利害関係者と連携することが想定されている。

（24）ヨーロッパ文化首都の遺産の維持活用という目的のような、少なくとも自治体の持っている文化領域に関わる知識や情報、専門能力だけでは対応しきれない問題――しかも、それらは文化領域を超えて都市戦略や都市再生に大きく関わっている――に対して、リヴァプール市内の文化団体に加えて、都市戦略や都市再生を担う団体等が参加することで、それらが持っている情報や知識、運営能力などが活用されることによって、自治体が単独で行うよりも明らかにより適切な対応（政策の策定、プログラムの詳細決定・準備、実施等）が実現されているということができるのである。

（25）この政策ネットワークは、Kooimanによるガバナンスの３つのモードの中では、半ばフォーマルな相互作用に基づいて意思決定を行っているという側面ではコ・ガバナンスに分類されるが、他方で自発的な社会的相互作用を基調

に自律的なアクターによって構成される比較的柔軟かつ開放的性格をもっているという点ではセルフ・ガバナンスの要素も持っている（Kooiman 2003）。これについてはどこまでガバナンスとして理念的に論じられる形態が実現しているのか、もう少し詳細な分析が必要である。また、意思決定や内部での様々な調整についても、リヴァプールの文化政策をめぐる政策ネットワークの実態に関してはこれ以上は明らかではない。ネットワーク内で具体的にどのように行われているかという点については観察あるいはより実態面に踏み込んだ調査が必要である。

(26) O'Brien（*ibid.*）及び上述のJane Beardsworth氏へのインタヴューに基づく。

(27) 上述のJane Beardsworth氏へのインタヴューに基づく。同様のことは、上述のRoyal Liverpool Philharmonic のMichael Eakin氏も述べている

(28) 上述のLeanne Jones氏へのインタヴューに基づく。

(29) 佐藤仁（2008）、佐藤健二（2007）を参照している。

(30) 潜在的価値の顕在化には、価値の向上や付加価値化も含まれる。

(31) 構築された地域イメージの地域社会への影響については、田中（1997）及び渡部（2009）を参照している。

(32) 文化的価値とは、文化に内在する、文化そのものの本質に関わる価値を指す。

(33) もちろん、リヴァプールの市民が全て文化首都が提示した未来像に同調したわけではないであろう。1990年のグラスゴーのヨーロッパ文化首都のときには、左翼系や労働者を中心に大きな反発があったと言われている（渡部2009, *op.cit*）。リヴァプールにおいても同様の反発はあったと思われるが、ただし、グラスゴーの経験より18年経過しており、1997年発足の労働党ブレア政権以降英国全体で文化を中心にした経済的政策の推進も行われてきたため、文化都市というイメージの受容も、それに伴う未来像の受容も、グラスゴーのときに見たような大きな反発はなかったと思われる。

(34) 一般的には、都市再生に対しては必ずしも賛成あるいは肯定的でない人たちも多いが、これはリヴァプール市においても同様で、2018年10月にリヴァプール市で開催されたヨーロッパ文化首都10周年を記念するシンポジウムにおいても、2008年の文化首都以降の都市再生の進展に対して問題点を指摘する一般市民参加者の声が聞かれた（筆者は実際にその場で耳にしている）。

参考文献

風間規男，2011,「公的ガバナンスと政策ネットワーク―複雑系理論を手がかりとして―」，新川達郎（編著）『公的ガバナンスの動態研究』ミネルヴァ書房，pp.113-148

――――，2013,「新制度論と政策ネットワーク論」，同志社政策科学研究，14巻２号，pp.1-14

佐藤健二，2007,「文化資源学の構想と課題」，山下晋司（編）『資源化する文化』弘文堂，pp.27-59

佐藤仁，2008,「今なぜ資源配分か」，佐藤仁（編著）『資源を見る眼――現場からの分配論』東信堂，pp.3-31

渡部薫，2009,「都市の自己イメージの変化と都市再生――英国グラスゴー市の文化政策の経験より」，熊本法学，118号，pp.221-278

――――，2014,「文化と都市再生をめぐる持続可能性からの考察―英国の政策的経験から―」，社会文化研究，第12号，pp.25-50

――――，2019,『文化政策と地域づくり―英国と日本の事例から―』日本経済評論社

Bailey, C., Miles, S. and Stark, P., 2004, ‘Culture-led Urban Regeneration and the Revitalisation of Identities in Newcastle, Gateshead and the North East of England’, *International Policy of Cultural Policy*, 10（1）, pp.47-65

BBC, 2018, ‘Does being a UK city of Culture create a lasting legacy?’, *BBC news 23 April 2018*, retrieved on 30 April, 2018, from https://www.bbc.co.uk/news/uk-england-43485141

Bell, D. and Oakley, K, 2015, *Cultural Policy*, Routledge

Bianchini, F. and Parkinson, M., 1993, *Cultural Policy and Urban Regeneration – the West European experience*, Manchester University Press

Boland, P., 2010, ‘“Capital of Culture – you must be having a laugh!” Challenging the official rhetoric of Liverpool as the 2008 European cultural capital’, *Social*

& Cultural Geography, 11（7）, pp.627−645

Booth, P. and Boyle, R., 1993, 'See Glasgow, see Culture', in Bianchini, F. and Parkinson, M.,（eds.）, *Cultural Policy and Urban Regeneration – the West European experience*, Manchester University Press, pp.21−47

Campbell, P., 2011a, 'Creative industries in a European Capital of Culture', *International Journal of Cultural Policy*, 17（5）, pp.510−522.

Campbell, P., Cox, T., Crone, S. and Wilks-Heeg, S., 2015, *Cultural Value: 'Evidence of Things That Appear Not?'*, Arts and Humanities Research Council

COoL, 2018, *Creative Organizations of Liverpool*, retrieved online on 30 April, 2018, from https://cool-collective.co.uk

Cox, T. and O'Brien, D.,2012, 'The "scouse wedding" and other myths: reflections on the evolution of a "Liverpool model" for culture-led urban regeneration', *Cultural Trends*, 21（2）, pp.93−101

DCMS, 1998, *Creative Industries Mapping Document*, DCMS

————, 2000, *Creative Industries: The Regional Dimension*, DCMS

————, 2009, *UK. City of Cultural working group report June 2009. London*: DCMS

————, 2014, *UK. City of Cultural consultation document December 2014*, DCMS

————, 2017, *UK. City of Cultural 2017 Guidance for Bidding Cities*, DCMS

De Propris, L., Chapain, C., MacNeil, S. and Mateos-Garcia, J., 2009, *The Geography of Creativity*, NESTA

Ebert, R., Gnad, F. and Kunzmann, K., 1994, *The Importance of 'Cultural Infrastructur' and 'Cultural Activities' for Creative City*, Comedia

Evans, G., 2001, 2005, 'Measure for measure: evaluating the evidence of culture's contribution to re-generation', *Urban Studies*, 42（5/6）, pp.959−985

Evans, G. and Shaw, P., 2004, *The contribution of culture to regeneration in the UK: a review of evidence*, Metroplitan University

Garcia, B., 2004a, ‘Cultural Policy and Urban Regeneration in Western European Cities: Lessons from Experience, Prospects for the Future’, *Local Economy*, 19（4）, pp.312−326

————, 2004b, ‘Urban Regeneration, Arts Programming and Major Events: Glasgow 1990, Sydney 2000 and Barcelona 2004’, *International Journal of Cultural Policy*, 10（1）, pp.103−118

————, 2005, ‘Deconstructing the City of Culture: The Long-term Cultural Legacies of Glasgow 1990’, *Urban Studies*, 42（5−6）, pp.841−868

————, 2011, ‘Impacts 08 - The Liverpool Model. A framework for impact research in Liverpool, 2008 European Capital of Culture’, in Taormina, A.（ed.）,*Osservare la cultura*, Edizioni Franco Angeli, pp. 20-35

Garcia, J.M., Klinger, J. and Stathoulopoulos, K., 2018, *Creative Nation: How the creative industries are powering the UK’s nations and region*, NESTA

Harvey, D., 1989, ‘From managerialism to entrepreneurialism: the transformation in urban governance in late capitalism’, *Geofiska Annaler, series B, Human Geography*, 71（1）, pp.3−17

Impacts 08, 2009a, *Liverpool’s creative industries: Understanding the Impact of Liverpool European Capital of Culture 2008 on the city region’s creative industries*, Liverpool: Impacts 08, retrieved online on 21 January, 2014, from http://www.liv.ac.uk/impacts08/Publications/projectreports.htm.

————, 2009b, *Liverpool arts sector, sustainability and experience: how artists and arts organisations engaged with European Capital of Culture 2008*, Liverpool: Impacts 08, retrieved online on 21 January, 2014, from http://www.liv.ac.uk/impacts08/Publications/projectreports.htm.

————, 2010a, *Creating an Impact: Liverpool’s experience as European Capital of Culture, Liverpool: Impacts 08*, retrieved online on 21 January, 2014, from http://iccliverpool.ac.uk/wp-content/uploads/2013/04/GarciaEtal2010Creating_

an_Impact-Impacts08.pdf

————, 2010b, *Neighbourhood impacts: A longitudinal research study into the impacts of the Liverpool European Capital of Culture on local residents*, Liverpool: Impacts 08, retrieved online on 21 January, 2014, from https://www.liverpool.ac.uk/media/livacuk/impacts08/pdf/pdf/Neighbourhood_Impacts.pdf

————, 2010c, *Volunteerting for culture: exploring the impact of being an 08 Volunteer*, Liverpool: Impacts 08, retrieved online on 21 January, 2014, from http://iccliverpool.ac.uk/wp-content/uploads/2014/12/VolunteeringForCulture.pdf

————, 2010d, *Media Impact Assessment: Evolving Press and Broadcast Narratives on Liverpool from 1996 to 2009*, Liverpool: Impacts 08, retrieved online on 21 January, 2014, from https://www.liverpool.ac.uk/media/livacuk/impacts08/pdf/pdf/Media_Impact_Assessment_part_2.pdf

Institute of Cultural Capital, 2019, *Impacts 2018*, retrieved online on 1 December, 2019, from http://iccliverpool.ac.uk/

Jones, P. and Wilks-Heeg, S., 2004, 'Capitalizing culture', *Local Economy*, 19（4）, pp.341–360.

Kooiman, J., 2003, *Governing as Governance*, Sage Publications

Kooiman, J. and Jentoft, S., 2009, 'Meta-Governance: Values, Norms and Principles, and the Making of Hard Choices', *Public Administration*, 87（4）, pp.818–836

Landry, C., 2000, *Creative City: A Toolkit for Urban Innovations*, Earthscan Publication（＝後藤和子監訳，2003,『創造的都市——都市再生のための道具箱』日本評論社）

LARC, 2018, *Liverpool Arts Regeneration Consortium*, retrieved online on 30 April, 2018, from https://larc.uk.com

Liverpool Culture Company, 2002, *Liverpool, the world in one city: Liverpool 2008 Capital of Culture bid*, Liverpool Culture Company

————, 2003, *Liverpool, the world in one city: the story unfolds*, Liverpool Culture Company

————, 2005, *Strategic Business Plan*, Liverpool Culture Company

Liu, Y., 2014a, 'Socio-Cultural Impacts of Major Event: Evidence from the 2008 European Capital of Culture, Liverpool', *Social Indicators Research*, 115（3）, pp.983–998

————, 2014b, 'Cultural Events and Cultural Tourism Development: Lessons from the European Capital of Culture', *European Planning Studies*, 22（3）, pp.498–514

————, 2016a, 'Cultural Event and Urban Regeneration: Lessons from Liverpool as the 2008 European Capital of Calture', *European Review*, 24（1）, pp.159–176

Markusen, A., 2010, 'Organizational complexity in the regional cultural economy', *Regional studies*, 44（7）, pp.813–828

Middleton, C. and Freestone, P., 2008, 'The Impact of Culture-led Regeneration on Regional Identity in North east England', presented to Regional Studies Association International Conference, *The Dilemmas of Integration and Competition*

Miles, S., 2005, 'Our Tyne: Iconic Regeneration and the Revitalisation of Identity in Newcastle -Gateshead', *Urban Studies*, 42（5–6）, pp.913–926

Newcastle City Council and Gateshead Council, 2009, *NewcastleGateshead: The making of a cultural capital*, ncjMedia

O'Brien, D., 2010, 'No cultural policy to speak of – Liverpool 2008. Journal of Policy Research in Tourism', *Leisure & Events*, 2（2）, pp.113–128.

————, 2011, 'Who is in change: Liverpool, European Capital of Culture 2008 and the governance of cultural planning', *Town Planning Review*, 82（1）,

pp.45−59.

————, 2014, *Cultural Policy: Management, value and modernity in the creative industries*, Routledge

O'Brien, D. and Miles, S., 2010, 'Cultural policy as rhetoric and reality: a comparative analysis of policy making in the peripheral north of England', *Cultural Trends*, 19（1/2）, pp.3−13

Paddison, R., 1993, 'City Marketing, Image Reconstruction and Urban Regeneration', *Urban Studies*, 30（2）, pp.339−349

Palmer/Rae Associates, 2004, *European Cities and Capitals of Culture*, Palmer/Rae Associates

Palmer, R. and Richards, G.（eds.）, 2007, *European Cultural Capital Report 1*, ATLAS.

————, 2009, *European Cultural Capital Report 2*, ATLAS.

Palmer. R., Richards. G and Dodd., D.（eds.）, 2012, *European Cultural Capital Report 4*, ATLAS

Parkinson, M. and Bianchini, F, 1993, 'Liverpool: A tale of missed opportunities?' in Bianchini, F. and Parkinson, M.（eds）, *Cultural Policy and Urban Regeneration*, Manchester University Press, pp.155−177

Redmond, P., 2013, *UK City of Culture 2017*, 23 January 2013 DCMS Blog, retrieved online on 23 April, 2018 from https://dcmsblog.uk/2013/01/uk-city-of-culture-2017/

Richards, G. and Palmer, R., 2010, *Eventful cities: Cultural management and urban revitalization*, Butterworth-Heinenmann

Rhodes, R.A.W., 1996, 'The New Governance: Governing without Government', *Political Studies*, 44, pp.652−657

————, 1997, *Understanding Governance: Policy Networks, Governance, Reflexivity and Accountability*, Open University Press

Rhodes, R.A.W. and Marsh, D., 1992, 'New Directions in the study of policy

networks', *European Journal of Political Research*, 21（1/2）, pp.181−205

The Independent, 2009, 'Andy Burnham: Every city should have a chance to be a British City of Culture', *Independent 8 January 2009*, retrieved online on 30 April, 2018 from https://www.independent.co.uk/voices/commentators/andy-burnham-every-city-should-have-a-chance-to-be-british-city-of-culture-1231928.html

The Work Foundation, Nesta, 2013, *Staying Ahead: the economic performance of the UK's creative industries*, DCMS.

Thompson, M., 2010, 'Liverpool 08: A Tool for Urban Regeneration?', conference paper to *Ravello Lab 2010*, October 21−23, Ravello, Italy

Throsby, D., 2001, *Economics and Culture*, Cambridge University Press（＝中谷武雄・後藤和子監訳，2002，『文化経済学入門―創造性の探究から都市再生まで―』日本経済新聞社）